

《書評》 イレーヌ・カラメ 『ショパン神話』

西村, 友樹雄
一橋大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/7329816>

出版情報 : Stella. 43, pp.243-250, 2024-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu
バージョン :
権利関係 :



《書評》

イレーヌ・カラメ『ショパン神話』

西村 友樹雄

文学と音楽との交流を扱った研究は枚挙に遑がなく、それだけに様々なアプローチが存在する。そのなかでも、特定の時代の音楽や個別の音楽家にかんする膨大な言説を参照して受容史を編むことで、両分野の交流の諸相を明らかにする研究方法が盛んとなったのは20世紀末以降のことだ。背景には音楽雑誌国際目録（RIPM）の創設やオンラインデータベース化、音楽家・音楽評論家が残した膨大なテキスト群の編纂事業（20年以上かけて刊行されたベルリオーズの音楽批評集はその好例である¹⁾）の進展などが考えられる。研究基盤の整備は多様・豊富な成果を生んだ。近年にかぎれば、ベートーヴェンに焦点をあてたマリ・ガボリオの『栄光の神話』（2017）、バッハを主題とするフレデリック・スーニャック『暗黒のバッハ』（2022）、そして本稿で取り上げるイレーヌ・カラメ『ショパン神話』（2023）が挙げられよう²⁾。

本書はカラメ初の著作で、2020年にフィレンツェ大学に提出された修士論文がもとになっている。本書の魅力は、現代の人々の間でも共有されているショパンの「神話（mythe）」が19世紀にいかにして形成されたか、そしてその神話に含まれる様々なステレオタイプを20世紀の言説がいかにかり越えようとしたかを、幅広いコーパスに基づいて説得的に示した点にある。

内容を検討する前に、本書のテーマである「神話」について付言しておこう。著者はこの語を、前出のマリ・ガボリオの定義を引きつつ、「伝説（légende）」との対比で説明する。「伝説」も「神話」も、当該人物についての虚構の情報を含む点では共通する。しかし「神話」は「集合的かつ精神的なイメージ」を持ち、「文化的コンテクストに従ってそれ自身が変化していく」点に特徴があり、ともすれば個別の挿話に還元可能で、静的な性格を持つ「伝説」と区別されるのである。したがって「ショパン神話」は、この作曲家についての言説——当然ながらそこにはショパンの「伝説」も含まれる——が積み重なり、具体的なイメージの総体が人々に共有されるようになったときに、初めてそう名指され

るものののだ。本書はこうした「神話」の生成と変遷の複雑な過程を解きほぐしながら、その背後にある「文化的コンテクスト」の諸相をも明らかにしてくれる。

ショパン神話にかかわる「文化的コンテクスト」には、楽譜の出版事情や音楽の聴取環境の変化など、様々な要素が考えられるが、本書が注目するのは作曲家を題材とした評論・小説・評伝を取り巻く状況だ。なぜなら著者によれば、本書が取り扱う 20 世紀中頃までのフランスにおいて、彼の神話の生成と伝播にもっとも貢献したのは活字メディアだからである。この分野で活躍した人物のうち、本書が特に紙幅を割くのが、バルザック、サンド、プルースト、ジッド、ジュリアン・グリーン、アランである。前 4 者はショパン研究でも言及される機会の多い文学者だが、後 2 者のショパン観を取り上げた論は決して多くないはずである。これらに加え、モーリス・ロリナなどのマイナー・ポエットや、エミール・ヴェイエルモズやボリス・ド・シュレゼールなど、研究者以外に広く知られているとはいえない音楽批評家の著作にも目配りがされている。フランスのショパン受容において役割を果たした文芸畑の人物はおおよそ網羅されていると言ってよい。

評者は、博士論文でジッドとショパンの関係を扱った際にフランスのショパン受容にも言及したこともあり、尽きることのない深い興味をもって全編を味読し、多くを教えられた。以下では、ジッドを中心とした評者の研究に関する点に絞って読みどころを列挙することとしたい。

19 世紀のショパン神話——病弱で陰鬱な英雄

通常、芸術家の神話はその死後に生成される。しかし「生きる伝説」であったショパンは、例外的に存命時にすでに神話の生成が始まっていた。音楽家を伝説的な人物たらしめたのは、第一にその突出した才能や波乱に満ちた人生であろう。それらに加え本書が注目するのは、1830-40 年代の新聞・雑誌を取り巻く状況である。この時代に爆発的に増大し多様化した購読者の期待に応えるべく、各紙は作品の分析やそれにもとづく評価よりも、音楽家の刺激的な挿話で彩られた記事を掲載する傾向にあった。これらがショパン神話の生成に果たした役割は大きい。

天才で病弱、悲劇の芸術家——メディアによって広められたこれらのショパ

ン像を一面的なものに見なし、その相対化を試みたのが彼の恋人だったジョルジュ・サンドである。音楽家の存命中に書かれた『ルクレツィア・フロリアーニ』(1846)をはじめ、いくつかの作品の登場人物には彼が投影されているとされるが、このことはサンドにとってかつての恋人が一作品のみに閉じ込められない多面的な存在だったことの表れだろう。『ヴィルメール侯爵』(1861)のユルバンは、アイデアが自然に湧いてくる天才としてではなく、作曲中のショパンがそうだったように完全性に取り付かれた人物である。また『アドリアニ』(1854)の同名の主人公は、ショパンのように人嫌いで、コンサートに消極的な音楽家である。

だがサンドの思いをよそに、19世紀後半のフランスはショパンを一面的に、特に「病弱さ」とのレッテルのもとで捉えがちだった。『19世紀ラールス百科事典』の記事「ショパン」はその傍証となろう。そこでは彼の楽曲は「総じて深い憂愁が刻まれている」とされ、前奏曲集は「陰鬱な観念の世界」を閉じ込めた作品集と評価されている³⁾。とはいえ、このことは必ずしもショパンが否定的に受け止められたことを意味しない。「陰鬱さ」「病弱」はむしろ、多くの不利な条件にもかかわらず、素晴らしい作品を数多く残し、その人生を芸術に捧げきったこの音楽家が類まれなる存在であることを証だてるものののだ。本書は、かかるショパン像の起源のひとつとしてリストの『ショパン』(1851)を挙げる。夭折の音楽家を「人間の弱さと格闘した天才」として描いたこのエッセイは、英雄伝・聖人伝としての側面が色濃いからだ。さらにモーリス・ロリナの14連の詩「ショパン」(1873年初出、1883年刊の『神経病』に収録)もこの系譜に位置付けられるという。なるほど「お前の音楽はいつも、——痛ましくあるいは不気味なのだが——反乱と自由の讃歌であり、後ろ足立ちする馬のいななきも、お前の鎮まらぬ心の叫びに比べれば堂々たるものではない」なる第3連には、英雄賛歌の響きが認められよう⁴⁾。しかしそれ以外の部分が描き出すショパンは、何より病魔と不安とに苦しむ芸術家である。実際同じ詩集に収められた詩「ピアノ」でも、ショパンは、「お前〔ピアノ〕に、憂鬱に満ち満ちた過剰さを注ぎ込む」「奇怪さに酔うこの大天使」と呼ばれているのである⁵⁾。そのため評者には、ロリナ作品におけるショパンは英雄や聖人というよりも、むしろ倦怠・退廃の美学を体現する存在のように映る。

いずれにせよ、19世紀後半におけるショパン神話は、音楽家の身体的・精神

的な不調にかんするイメージがその主たる基盤となっていた。ここで、まさにその時代に多感な時期を過ごしたジッドのショパン観を見ておくことは無駄ではないだろう。1869年に生まれ、幼少期からこの音楽家に親しんでいた彼は、1889年——この年にロリナの『神経病』を読んでいる——、「サンドとショパンがマヨルカ島で過ごしたであろう奇妙な一夜」や彼らの「狂気の沙汰」に思いを馳せながら、友人ピエール・ルイスに小説の構想を語る⁶⁾。翌年『アンドレ・ワルテルの手記』として実現するその小説の語り手は、従姉の繊細で頑なな神経を高ぶらせるために、ショパンのスケルツォを演奏する。またジッドの母親は、一人息子を音楽会や展覧会に頻繁に連れ出していたが、当時のスターピアニスト、アントン・ルービンシュタインが開いたショパン・コンサートにかぎっては行くことを禁じた。この音楽家を「不健康 (malsain)」だと見なしていたためだ（なおジッドはこの時の演奏を聴けなかったことを死ぬ直前まで悔やみ続ける）。以上を見るかぎり、若き日のジッドも19世紀的なショパン神話のパラダイムから決して自由ではなかったと言える。

20世紀——ショパンの「作品」へ

20世紀に入ると、ショパン神話に大きな変化が見られるようになる。芸術作品の自律性を重んじる動きや、音楽批評や音楽学の専門分化などを背景に、ショパンの数々の伝説やそれらを作品理解に結びつける姿勢が見直されるとともに、作品を単独で論じようとする傾向が強まったのだ。またこの時期には作曲家に与えられた比喩的な呼称の出現頻度にも変化が見られた。本書の読みどころのひとつである第3部では、主たる呼称7語が、それぞれの語源に遡ったうえで、使用された文脈などを踏まえた精緻な分析が行われている。著者は、そのうちの「シルフ」「アリエル」「天使」について、用例がほぼ19世紀に限られていると指摘し、その原因が、上記の語が作品の曲調よりも音楽家自身の独特な風貌や繊細な演奏スタイルと結びついていたことにあると述べる。19世紀後半以降、実際にショパンに接した人々が没するにつれ、上述の呼び名の人気は次第に薄れていき、評伝や楽曲からも導くことが可能なより一般的な呼称——「天才」「詩人」など——が20世紀に残ったのである。

自明とされてきた音楽家と作品との深い結び付きが再検討されるなかで、文学者たちのショパンの語り方にも変化が見られた。そのひとつがショパンの作

品を通して自分の芸術観を示す方法であり、もうひとつがショパンの作品を作品外の情報を排除して論じる方法である。前者の方法をとった代表的な作家であるブルーストは『スワン家のほうへ』で、ショパンの楽節の特徴を「出発時の方向とはずいぶんかけ離れた〔…〕とんでもないところに」向かいつつも、元の場所へ「いっそう深い意図を秘めて」正確に帰還する点にあると述べているが、著者はこの箇所を、作家の考える理想のエクリチュールの説明でもあると指摘する⁷⁾。これに対し後者の方法は、アランの音楽評論に見ることができ。「音楽はそれ自身で完結している」との自説を持つこの哲学者は、事実ポロネーズやヴァルスのなかに作曲家の不幸や祖国への思いを読み取ろうとしがちな人々の態度を戒めるのである。

著者は、20世紀の文学者たちのショパン観を検討したのち、その集大成としてジッドを論じる。前述のとおり、若き日のジッドは19世紀的ショパン神話のパラダイムからは決して自由ではなかったものの、少なくとも20世紀に入ってからにはそれに真っ向から対立する立場をとる。アランのように、ショパンの実人生を楽曲のなかに読み込まないジッドの『ショパンについてのノート』（1931）は、これまでの過った解釈を退けるための、「楽曲に対する注釈」として理解できる。著者が重視するのは、こうした「注釈」がジッド自身の芸術論を語るための口実、もしくは芸術論そのものである点だ。ここに自身のエクリチュールとショパンのフレーズを重ね合わせているとされたブルーストとの類似点を見ることも可能だろうが、おそらくジッドのショパンへの思い入れはブルーストよりも深いもので、もう一人の自分（アルターエゴ）と見なしていたのではないか。この説に従うならば、最晩年のジッドの発言「私はほかのどんな人間、どんな作家よりもショパンと時を過ごしてきた」における「ショパン」は、「私自身」と読み替えることができよう⁸⁾。

すでに別稿でも論じたことだが⁹⁾、ジッドは同時代のピアニストたちによるショパンのロマン主義的な——ことさらに聴衆の情感をあおるヴィルチュオーズ的な——演奏を嫌った。しかし彼はほかならぬこの作曲家の作品自体にロマン主義的な側面があることを認めざるを得なかった。このことは同時に、ショパンに投影された自らのうちに、己が退けようとした当のその要素に直面することでもあった。著者によれば、このロマン主義的な側面とは官能的で「不健康」な部分だった。ジッドにとり、抑制されたタッチでショパンを演奏するこ

とは、己を脅かすこの部分を何とか制御し沈黙させようとする倫理的行為でもあった。以上の主張は、ジッドの音楽観におけるエロティシズムの役割を見極めようとする近年の研究の成果と矛盾するものではない¹⁰⁾。

ジッドは、19世紀のショパン神話を彩った数々の伝説を拒絶し、楽譜に基づく作品の正しい理解を試みた。しかし神話を打破するかに見えるその振る舞いには、本書の表現を用いれば「書き換え (réécriture)」とも呼ぶべきものが含まれていた。「最も純粋な音楽」なる称号や文学的な比喻に基づく楽曲の視覚的イメージなど、音楽家と作品にさらなる魅力を付与するこれらの要素は、ショパン神話を更新し永らえさせるものに外ならない。誇張された19世紀的な音楽家像を払拭すべく、実証的手法に基づくフランス初の本格的ショパン伝『フレデリック・ショパン——その人生と作品 (1810-1849)』(1913)を執筆したエドゥアール・ガンシュも例外ではない。彼はポーランドの英雄としてのショパンを熱く歌い上げるとともに、20世紀には使われなくなった呼称「天使」をししばし用いた。その意味でガンシュは19世紀的なショパン神話の破壊者であると同時に継承者であるとも言えよう。かくのごとく芸術家の神話は決して消滅することはなく、ただ「変化」し続けるのだ。

本書のコーパスはフランス語文献に限られているが、それはフランスこそがショパン神話の発祥地であるからだ。とはいえ著者は、その神話がフランスから各国へと伝播し独自の展開を遂げた事実も見逃しておらず、ショパンと特に関係の深い国々（ポーランド、ドイツ、オーストリア、イギリス、イタリア）におけるショパン神話の研究が俟たれると述べている。また、本書が言及しなかった20世紀後半以降のショパン神話について著者は、ハリウッド映画やテレビドラマ、バンド・デシネやテレビゲームなどのサブカルチャーの果たした役割を無視できないと言う。今後のショパン神話研究はより領域横断的なものとなるに違いないが、本書の方法論は依然として重要であり続けるだろう。

筆を擱くにあたり、蛇足ながら評者が気になった点について述べておきたい。それはショパン神話における「反ショパン」的言説の位置付けである。たとえばワーグナー神話の変遷を辿ろうとすれば、熱烈なワーグナー信奉者の言説のみならず、反ワーグナー主義者のその重要性も評価せねばなるまい。ショパンはワーグナーほどに多くの批判者を持たなかっただろうが、そうであっても

作品の価値を疑問視する言説は決して少なくなかった。本書でも、ショパンを徹底的にこき下ろしたアンドレ・スュアレス——もっともそれはショパン批判の名目で行われた、仇敵ジッドに対する罵倒だったのだが——が取り上げられているが、彼が用いた「結核患者」「女っばい」などの罵倒の文句は、ショパン神話を取り巻く文化的コンテクストと無関係ではあるまい。本書第3部で取られた手法は、数々の不名誉な呼称・文句の分析にも応用できるのではないだろうか。ショパンに否定的な人物はどのように音楽家と作品を形容し、それに対し称賛者はどのように反論したのか、両者の言説はどのようにショパン神話の生成・書き換えに貢献したのだろうか¹¹⁾。その一端なりともが今後の研究で明らかにされんことを強く望む次第である。

註

- 1) Voir Hector BERLIOZ, *Critique musicale : 1823-1863*, Paris : Buchet-Chastel / Société française de musicologie, 1997-2020, 10 vol.
- 2) Voir Marie GABORIAUD, *Une vie de gloire et de souffrance : Le mythe de Beethoven sous la Troisième République*, Paris : Classiques Garnier, 2017 ; Frédéric SOUNAC, *Black Bach ou Qui a peur de Jean-Sébastien ? : Valeurs culturelles et antihumanisme*, Chateau-Gontier : Aedam Musicae, 2022, 2 vol ; Irene CALAMAI, *Le Mythe de Chopin (XIX^e - XX^e siècles)*, Paris : Classiques Garnier, 2023.
- 3) «Chopin (Frédéric-François)» in Pierre LAROUSSE, *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Paris : Administration du Grand dictionnaire universel, 1869, t. IV, pp. 185-186.
- 4) Voir Maurice ROLLINAT, «Chopin» in *Les Névroses* [1883], Paris : G. Charpentier et C^{ie}, 1885, pp. 53-55. なお、詩人の父フランソワの友人でもあったサンドは、おそらくこの詩を念頭に置いて、モーリスのショパン観を批判している。Voir la lettre de George SAND à Maurice ROLLINAT, du 21 janvier 1873, dans la *Correspondance de George Sand*. Sous la direction de Georges LUBIN, Paris : Garnier, 1989, t. XXIII, pp. 410-411.
- 5) Maurice ROLLINAT «Le Piano», *op. cit.*, p. 51.
- 6) Voir Lettre d'André GIDE à Pierre LOUÏS à la fin septembre 1889, dans la *Correspondances à trois voix (1888-1920)*. Édition établie et annotée par Peter FAWCETT et de Pascal MERCIER, Paris : Gallimard, 2004, pp. 95-96.
- 7) マルセル・ブルースト『失われた時を求めて2 スワン家のほうへ II』（吉川一義訳）、岩波書店、2011年、319頁。
- 8) André GIDE *Notes sur Chopin*, Paris : Gallimard, 2010, pp. 142-143.

- 9) 拙稿「アンドレ・ジッドにおける反ロマン主義——1920年代の古典主義・ロマン主義論争——」, 『ステラ』第41号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2022年, 93-112頁を参照されたい。
- 10) Voir Frédérique TOUDOIRE-SURLAPIERRE, «“Il y a un Gide intime qu'on ne connaît pas. Coupez.”», in *Gide ou l'identité en question*. Sous la direction de Jean-Michel WITTMANN, Paris : Classiques Garnier, 2017, pp. 77-99 ; Augustin VOEGELE, « André Gide ou Chopin comme *alter ego* » in *Écrire avec Chopin : Frédéric Chopin dans la littérature*. Textes réunis par Peter SCHNYDER et Augustin VOEGELE, Paris : Honoré Champion, 2020, pp. 167-176 ; Augustin VOEGELE, *Musique et désir chez André Gide*, Paris : Classiques Garnier, 2020, pp. 281-312.
- 11) ショパンに批判的な言説については次を参照——«Anthologie (1832-1914)», in *Chopin and his critics : An Anthology (up to World War I)*, edited by Irena PONIA-TOWSKA, Warsaw : The Fryderyk Chopin Institute, 2011, pp. 418-425.